



『 一年の計は元旦にあり 』 (ラインホルド・ニーバーの祈り) から

校長 本田 哲朗

あけましておめでとうございます。

新春を迎え、令和2年が災害にみまわれる事無く、生徒諸君に取り大きなおおきな実りある年でありませぬ様に、心から祈念します。

我が国の文化に『一年の計は元旦にあり』ということわざがあります。これは、年が改まる節目に、自分なりの決意を持つ大切さを教えています。実際の所、計画なくして結果などあるはずがありません。人がこだわる物事一般に対する理(ことわり)と言っても良いでしょう。諸君も、この一年を充実した年にする為に、具体的に大きな目標と緻密な計画を立て、必ず行動に移して下さい。

昨年はレオナルド・ダ・ヴィンチ没後 500 年目に当たる年でした。これを好機ととらえ、私はレオナルド関連の著書を 4 冊読破しました。頁数で約 1500 頁に及びますが、解っていた様で理解してなかった事、全く誤解していた所の修復が出来たと思います。また、付带的には“天才とは言え、その転機に必ず師との出会いがあった”と言う持論に、確信を持てた事は良かったです。なぜなら彼もまた、例外ではなかったからです。しかし、天才の名を冠されるにはそれなりの理由があります。彼は出会った師を必ず追い越し、独創的境地まで高めた事です。その中で明らかだった事を一つだけ書きます。レオナルドの目は、今で言う 8K の解析力で、現象をとらえていた事です。事象の時間を微分し、時に積分し、全体像を描く事が出来た人です。つまり、同じモノを見ても、他の人とは見え方が異なっていたのです。

実は、これはレオナルドだけの事ではありません。諸君が勉強しているのもそのためです。人は、事象の総てを自分のレベルでとらえ、考えます。助言を参考にしたり、情報を活用する事はあっても、最終的には自分の理性と感性、知性で判断します。そのインプットからアウトプットに至る過程で、自分が関与するのですが、実は、関わる自分の立ち位置(レベル)で見え方が異なってくるのです。思うに、知識が豊かで様々な経験豊富な人、そして、自分を鍛え上げた人ほど、俯瞰できる高度も高く、視野は広いはずです。レオナルドを読んでいて思った事は幾つかありますが、彼の知性が同世代人と違うのは、努力で鍛えあげたからなのだと思います。つまり、その事で見え方も違っていたし、当然思考も異なっていたわけです。私は、先人が残してくれたモノを想うとき、学ばなくてはならない理由の一つをここに垣間見るのです。



ニーバーの祈り

- 【 かえる事のできるものについて、それをかえるだけの**勇気**をわれらにあたえたまえ。
- かえる事のできないものについては、それを受け入れるだけの**冷静**さを与えたまえ。
- かえる事のできるものと、かえることのできないモノを、識別する**叡智**を与えたまえ。】